

(四) トマス金鰐次兵衛神父

きんつばじひようえ

伝承された活躍

『昔長崎ニ金鰐次兵衛ト云者アリ……』(『長崎港草』)、「…切支丹之張本伴天連にて常に金鰐の脇指を以て人皆金鰐次兵衛と云…」(『長崎根元記断簡』)、「…彼者ハ魔法ヲ覚シニヤ目前ニ有之ト云ヘトモ忽見失フ程ノ者ニテ…」(『長崎志・正編』)等々と長崎旧記類に、魔法を使う伴天連金鰐次兵衛のことが語り継がれている。

この人、金鰐次兵衛こそ、修道名をトマス・デ・サン・アウグスチノというアウグスチノ会の日本人神父で、西坂の丘で穴吊りの極刑を二度も受けて死んだ殉教者である。ホセ・シカルドはその著「日本キリシタン教会」に次兵衛神父の活躍を「勇敢な獅子のように」と表現した。

將軍家光の寛永年間、キリシタンに対する迫害は峻烈を極める。その中で信徒たちが不



トマス金鰐次兵衛像
(26聖人記念館底)

屈の精神を示して殉教していったのには、幕府の追放令に背いて潜伏し、各地で信徒たちを導き励まし、共に殉教した神父たちの存在が大きな力になっていた。

トマス金鰐次兵衛神父も、このような神父の一人である。神出鬼没。幕吏の意表をつく活躍ぶりが魔法幻術を使う伴天連として、伝説的人物にしたのであった。

司祭となって故国に潜入

次兵衛は大村の生まれで、父はレオ小右衛門、母はクララおきあ。貧しいながらも熱心なキリシタンの家庭で育った。父母はともにのちに殉教者となっている。六歳で有馬のセミナリヨに入学し、幼少からイエズス会学校のすぐれた教育を受ける。一六一四年の江戸幕府のキリシタン禁令の発布によりマカオに追放されてからは、マカオのセミナリヨで続けて学んでいる。

一六二〇年、マカオのセミナリオが解散したので二十歳の青年トマス次兵衛は迫害下の日本に戻り、伝道士として信徒たちを助けた。迫害下の信徒たちが聖なる秘跡による恵みと慰めを求めることの大きいことを知ると、信徒たちのために司祭となって働きたいという望みを抱くようになった。その実現のため一六二二年、次兵衛はマニラに渡り、アウグスチノ会の修道院へおもむいて入会を願ったのである。

一六二八年、セブ島の司教ペドロ・デ・アルセから念願の司祭に叙階された。次兵衛神父は一日も早く日本へ帰りたいと願うが、マニラ政府はすでに危くなった日本との貿易関係の破綻を心配して宣教師の日本渡航を禁止していたので、修道会の上長たちはなかなか許可を与えなかった。

一六三一年、長崎奉行竹中采女正重義が派遣した使節団がマニラにやってきた。スペイン船の御朱印貿易船掠奪事件に対する弁償要求交渉が目的であった。マニラで帰国の機会を待っていた次兵衛神父が通訳を命ぜられたので日本の国内事情をよく知ることが出来た。日本ではクリシタン迫害はますます酷くなっているという。神父や信徒たちが大勢殉教していく様子を聞き、胸もはりさける思いであった。一日も早く帰国したいと心は逸るが許可が出ない。

特にマカオのセミナリオの解散後、マニラやローマで勉強して司祭になったイエズス会のペトロ岐部や、ドミニコ会の西六左衛門神父らが日本渡航に成功しているので次兵衛神父はじっとしていられない思いで一杯だったのである。現在、ローマのアウグスチノ会本部修道院に次兵衛神父直筆の見事なラテン語の手紙が所蔵されている。一六三〇年八月二日付、マニラ発の手紙で彼は迫害の激しさの増す日本へ一日も早く帰国して同胞のために働きたいと、切々たる気持を吐露している。そして日本に行く事情を直後総会長に説明し

たいとローマに行く許可を求めているのである。この手紙がローマに届いたのは一六三三年五月二十九日と記録されている。しかし、その返事がローマから届く前に、次兵衛神父が日本に帰国潜入することにマニラの上長が同意した。

一六三一年、トマス神父はマニラに寄港した日本船の船長の好意で変装して乗船、ついに日本に帰ることに成功したのである。九年ぶりの故郷であった。長崎入港前に下船して、ひそかに上陸、長崎でポルトガル人たちの援助を受けながら日本人信徒の家に匿われた。長崎弁を用い、長崎人のように装って神父と悟られないよう細心の注意を払いながら、トマス次兵衛神父の殉教への道の歩みが始まったのである。

長崎奉行所の馬丁

当時のアウグスチノ会日本管区長はグティエレス神父であった。神父は一六三一年十二月、アントニオ石田神父らと雲仙に連行され、熱湯地獄の拷問によって背教を迫られたが承知しなかったので長崎の桜町牢に連れ戻されていた。次兵衛神父の大胆な活動が始まる。神父は長崎奉行所の馬丁になりましたのである。奉行所の構内を怪しまれなくて出入りできるようになると、こっそりと桜町牢屋を訪れ、グティエレス神父らと会うことが出来た。グティエレス神父は十年近く日本を離れていた次兵衛神父に詳しく日本の事情を説

明し、活動についての注意を与える。町のキリシタンたちの連絡もとれるようになった。昼は馬丁として働き、夜は隠れ家で信徒に赦しの秘跡を授け、ミサを献げた。迫害に心が弱くなっていた者たちに勇気が甦った。

大山狩りで探索

一六三二年九月、グティエレス神父らは桜町牢から引き出され、西坂で殉教する。

一六三四年、長崎奉行として着任した榊原飛騨守と神尾内記が、將軍家光の厳しい取締りの命令を実施するため新しいキリシタン覆滅の手を打った。「市民は必ず仏寺の守り札を身に着けよ」という命令である。次兵衛神父は不眠不休の活動で信徒を励まし導く。奉行所は長崎市民が命令に従わないことに不審を抱いた。宣教師の潜伏に気づき、探索を厳しくし、密告者に莫大な賞金をかけた。

危険を感じていち早く馬丁を止めて姿を消した神父を怪しみ、奉行所は人相書をつくって指名手配を行った。

一六三五年、次兵衛神父が戸根（現在、琴海町）の山中に隠れているという情報が奉行所に入った。長崎奉行は佐賀、平戸、島原、大村の四藩に命じて西彼杵半島の大山狩りを行った。一人一步の間隔で列を組み、山を越え、谷を渡り、蟻のはい出るすきもない程の

嚴重さで三十五日に及んだもので、のちのちまでの語り草となったものである。「大村家覚書」に「山関之事」と記され、『大村見聞集』にも収録されている。しかし、捕えたのは塩焼唯一人。琴海町の山奥にいまも次兵衛岩という洞穴があり、神父が潜んでいた所という伝承が残るが、当の次兵衛神父は江戸にいた。「彼者ハ魔法ヲ覚シニヤ目前ニ有之ト云ヘトモ忽見失フ程ノ者ニテ」役人から逃れて長崎から出奔したと『長崎志』は記している。大村藩では神父から指導を受けたキリシタン七十一名を捕えて火刑と斬罪に処して事件の始末をつけた。

江戸に飛んだ次兵衛神父は事もあるうに將軍の小姓たちに伝道していた。小姓数人がキリシタンになったことが発覚して処刑された。激怒した家光の次兵衛召し捕りの厳命が下る。長崎奉行所は近国諸所に関所を設け、長崎から出る者には往来手形を出し、手形のない者は捕えるようにと触れを出した。九州における往来手形の始まりという。

トマス次兵衛神父は信徒たちのために一日でも長く生きながらえようと、これに対応してさまざまな姿に身を窺し、山間僻地に隠れ、深山の洞穴に身を潜める。「金鰐の脇差」を帯びて武士に化けていたというのは、この間の活動を物語るものである。長崎市戸町の金鰐谷の洞穴は神父が隠れ住んだ所という伝承があり、金鰐谷の名も伝承に由来している。次兵衛はマニラで修行した魔法使いとも噂された。

捕縛と拷問

しかし、ついに一六三六年、次兵衛神父が捕えられた。奉行所が放った隠密によったが、彼も奉行所の役人もその人が神父だと知らなかったのである。名を尋ねられたとき神父が「トマス・デ・サン・アウグスチノ修道士、名は次兵衛、聖アウグスチノ会の神父である」と答えたので、役人たちは驚き、ついで歓声をあげた。密告者には賞金として銀の棒三百本が与えられている。役人たちは神父が魔法で逃げないように、二重に縛った。次兵衛捕縛のニュースは全国に飛び、人々はキリシタンもこれで終りだと噂したという。

捕縛に手を焼いただけ神父への役人の憎しみは大きかった。彼は数ある殉教者の中でも言語に絶する拷問を受けた一人となる。

最初の拷問は水責めであった。牢から引き出し裸にした神父の肌には鞭と鎖による苦行のあとがあった。ただでさえ艱難困苦の日々を送りながら、神父は身を鞭打って祈っていたのである。しかし、役人たちは崇高な神父の心を理解できなかった。口々に嘲笑と怒声を浴びせながら、樽のように腹がふくれるまで神父の口に水を注ぎ込み、つぎは焼き固めた割り竹で仰向けに床にねかせて腹を叩くのである。気を失った瀕死の神父を牢に運んで手当をし、また同じ拷問を繰り返してキリシタンを棄てよ、と命じた。従わない神父に

拷問の方法はエスカレートしてゆく。鉄の針による生爪はがし。鋸先を使つての筋肉の引き裂き。神父の全身で傷つかぬ所はなくなってしまう。しかし、口と舌はまだ無事だったので神を賛美し、役人たちに言った。「真の神の教えに目を開きなされ」役人は神父の口を打ち、猿ぐつわをはめて牢に戻した。

穴吊りの拷問と奉行所の策略

一六三七年八月二十一日、次兵衛神父は、彼に宿をかしたことを咎められて入牢していた十二人のキリシタンたちと共に西坂の刑場に連れて行かれた。刑場には穴吊りの刑の用意がされていた。翌二十二日、ポルトガル船六隻が入港したが、乗組員ディエゴ・ヌニェスが殉教を目撃した証言を残している。

「いつも殉教の場所になっている所に、十二人の日本人男女が幾つかの穴に逆さ吊りにされていた。体は地面の下に隠れ、膝のあたりに締めつけられた二枚の板の上で足だけが地上に並んでいる。彼らは死ぬまでこのままの状態で放っておかれるのである。この聖なる人々の中にアウグスチノ会のトマス神父という修道士がいた……」

ところが二十三日、長崎奉行は次兵衛神父を穴から出し、気を失っている彼を牢に戻して手当させたのである。それは入港したポルトガル船に次兵衛神父に経済援助したポルト

ガル人が乗船しているという密告があったので、神父に指名させて密告の裏付けを取るためであった。それが出来ればそのポルトガル人は処罰され、財産を没収できたのである。

同時に次兵衛神父が転び、密告者は神父自身であるというデマが広がった。これはキリシタンたちを失望させようとする奉行所の策略であったので、この噂は意図的に奉行所に広められ流された。平戸オランダ商館長も日記に長崎からもたらされたこの噂を記している。本当の密告者は背教者^{はいきよしや}ジョアン・リベイロ、日本名を庄左衛門という者であった。イサベル・ピンタというポルトガル人女性と結婚したとき洗礼を受けていた。一六三一年、マニラから潜入帰国した次兵衛^{かくま}を匿った人物でもある。キリシタン弾圧が厳しくなるとき、彼は信仰を棄て、妻イサベルはマカオに追放されていたのである。勿論、次兵衛神父は証言しないし、当のポルトガル人たちが乗船すらしていないことが判明したのである。しかし、神父は自分が背教したというデマが流されているということを知って苦しんだ。何よりも信徒たちが力を落すことを心配したのである。この奉行所の策略によって神父は良心の名誉さえ奉獻することになったのである。

殉教の栄冠^{えいかん}

一六三七年十一月六日、転んだという噂にもかかわらず、再び穴吊りの刑に処せられる

ことになった。今度もかつて神父に宿をかした四人の信徒が共に処刑されることになった。四人の信徒は町を引き回されて西坂の刑場に連れて行かれたが、次兵衛神父は口にさるぐつわをはめられ、四方をふさいだ小さな駕籠^{かこ}に乗せられて別の道から刑場に運ばれた。背教したというデマを流していたので真相を隠そうとしたのである。

しかし、八月に入港して第一回目の穴吊りを目撃したポルトガル船の乗組員は第二回目の穴吊りでも次兵衛神父が殉教する現場に立ち合って、「彼は決して背信したのでないことを確信し、キリストの兵士を穴の中に見たことを私は宣言する。日本人も云っているように背教者であれば、この穴吊りの拷問を受けることは決していないのである」と証言している。

次兵衛神父はたびたびの拷問で弱り果てていたので、一番先に息を引き取った。殉教者たちの死体は重い石をつけて海に捨てられた。デマは霧散^{むさん}した。日本に帰って六年。神と人への愛に貫かれた殉教への旅路であった。彼が導いた信徒六三七人が信仰を守って殉教した。

次兵衛神父の感嘆すべき生涯を神はそのまま埋^{うづも}れさせることはなさらなかった。神父への愛と崇敬^{すうけい}はずっと教会に引きつがれ、今再び私たちの人間としてのありようを導く光となっているのである。